

分人性のポエティクス： 書記された彼岸から今ここの儀礼へ

浅井優一
(東京農工大学)

はじめに

本発表は、「分人性のポエティクス：書記された彼岸から今ここの儀礼へ」というタイトルが示唆する通り、メラネシア地域の人格や社会性についての研究を精力的に進めている文化人類学者マリリン・ストラザーン (Marilyn Strathern) が使用する「分人」(dividual) という概念を、ポエティクスおよび言語人類学の儀礼論に依拠して捉えることを通じて、フィジーを含む現代メラネシアを規定するメタ・テキストの所在が、植民地期に書かれた公文書から、今ここの相互行為自体に見出されることを指摘するものである。

具体的には、この「分人」という概念、あるいは、ストラザーンを中心軸とする現在のオセアニア人類学の展開が、ローマン・ヤコブソン (Roman Jakobson) の詩的機能に関する論議、さらに、それに依拠してマイケル・シルヴァステイン (Michael Silverstein) が展開した儀礼コミュニケーション論との親和性を示唆する。その上で、現代フィジーで起きた事例を分析したい。特に、2010年にタイレヴ地方ダワサム地域で行われた地域の最高首長の就任儀礼を取り上げる。この儀礼実施をめぐる、地域が分断される出来事が起きたが、その背景となったのが、19世紀後期からイギリス植民地政府によって実施されたフィジーの社会集団の文書化である。この文書に着目し、各集団が、パースの記号論の言い方を引用すれば、類像的に記述されたこと、集団同士の比較対照性が顕著になるように記述されたことに、そのような出来事に端を発していることを示唆する。

すなわち、フィジーにおける植民地期の文書化を通じて、集団間の序列が強く意識され、「自集団」と「他集団」という集団の相対的比較を前提として、両者を二項対立的に(対照的に)捉るような語り、一般に「外来王」の語りとして理解される形式が顕著になる(前景化する)過程が、この植民地期の文書化を通して進行してきたのではないかという問題である。フィジーの植民地期につくられた文書が、神聖・不可侵なものであると位置付けられ、地域での政治的争いなどがあつた際には、この文書が真実の所在なるものとして提示され、仲裁されてきた。しかし、今日のフィジーでは、その文書の記述ではなく、文書化によって生み出された土着集団による意思決定、彼ら自身が従事する語り自体に、真実の

所在が見出されるようになってきている。したがって、その過程では、文書には真実が記載されていない、文書には集団の過去について間違った事実が記されているという主張がなされ、時には、文書の記述にそぐわない意思決定が行われるようになる。言い換えれば、植民地政府を象徴する文書の権威の凋落し、文書が生み出した「今ここ」のフィジー土着の民 (*itaukei ni vanua*) が従事する語りや行為への権威の所在が移行していること、後者に社会文化を規定していく審級が見出されるのである。このような現代フィジー社会の記号秩序が、ストラザーンが喝破している「分人性」という概念を用いて捉えようとするメラネシアの社会性／人格なのであり、それこそが、ヤコブソンの詩学から、そしてシルヴァスティンがそれを敷衍して展開したような儀礼コミュニケーション論が捉えようと試みるコミュニケーションの生成変化（相互行為の指標的類像化）の所在であることを示唆したい。

1. ヤコブソンの詩学からシルヴァスティンの儀礼論へ

ヤコブソンの6機能モデルの詩的機能は、連続性の原理に伴って展開するコミュニケーションの連辞軸に、範列をなす等価性の原理が連辞軸上に表れることである。つまり、連続性の原理で成立しているコミュニケーションの過程に反復が立ち現れるというのが、詩的機能・詩的構造化である (Jakobson, 1960)。シルヴァスティンは、言語の問題にフォーカスしたヤコブソンの6機能モデル、そのうちの詩的機能に関する問題系を、社会文化において営まれる相互行為一般へと敷衍していった。特に、人類学的研究においては長い研究蓄積がある儀礼の問題に、この詩的機能という視座を結び付けていった。儀礼が詩的構造化された行為であり、そうではない詩的構造化の緩慢なコミュニケーションが、日常的な相互行為や出来事（儀礼性の低いコミュニケーション）であるとされている (cf. Silverstein, 1993)。

2. マリリン・ストラザーンの「分人」という視座

その上で、ストラザーンの「分人」(dividual) という視座について考えてみたい。ストラザーンは、メラネシアのパプアニューギニアの研究をしていることで知られており、現在の社会文化人類学を牽引する人類学者の一人である。様々な著作を残しているが、そのうちの2冊を取り上げよう。

一つ目は、『The Gender of the Gift』である (Strathern, 1988)。これは1988年に書かれていて、かなり古い著作である。文化人類学では良く知られたジェームス・クリフォードらの『Writing Culture』と同時期に出版されたことになる。ストラザーンは、とりわけ2000年以降になって、いわば発掘されるようなかた

ちで、脚光を浴びていったと言える。つまり、ずいぶん前から、ストラザーンは、現在の人類学的展開、しばしば存在論的転回と呼ばれるような動向にあたるような議論をしていたことになる。この「分人」という概念が、どのように言及されているかという点、「メラネシアの人々は、個人として理解されるのと同様に、分人として見なされる。固有で個別の实在として扱われるような存在ではない。」と述べられる。つまり、私たちが、「個人」と範疇化するような実体として扱われているとはいえないとする。「彼らは、彼ら自身の内部に一般化された社会性を含み持っている。実際に、メラネシアの人々は、彼らを生み出す諸関係の、複数的で複合的な場として、頻繁に構成される存在である。」すなわち、メラネシアにおける人格は、コミュニケーションの場と出来事そのものであるというような言い方をしている。社会的諸関係の束のようなものであって、それは常に、再構成され続けていく出来事の連鎖でもある。したがって、「個人」(individual)であるよりは、「分人」(dividual)とでも呼べるような存在として現れ変容し続ける過程として捉えられる。

より近年になって(2004年)出版された、ストラザーンの傑作と目される作品『Partial Connections』(部分的つながり)の中で、この「分人」という概念を、言い換えているようなところがある(Strathern, 2004)。「あるイメージが創出する効果は、別のイメージとして提示され得る。」ある像は、それと対になる像を「生み出す」ものとして捉られている。「私たちが、パフォーマンスや儀礼の社会的文脈として捉えているものは、比喩の連続的な生起のように、像とその対象の連鎖であり、それぞれの像は、その前の像と、まさしく同じように提示され、それによって引き出されたように提示されるものである。」としている。ストラザーンはこのような出来事の反復的な生起と再構成の過程、そこにメラネシア的な人格なるものがある、あるいは、喚起されると捉えるのである。イメージの連鎖的な生起という表現を通してストラザーンが描こうとするメラネシアの本質は、ここに在ると言えるだろう。

3. サーリンズの構造人類学からトーマスの歴史人類学へ

以上の略述で既に、ストラザーンの議論が、ヤコブソンの詩的機能の概念、およびその後のシルヴァスティンへと続く儀礼コミュニケーション論と強い親和性があることが分かるだろう。ストラザーンの分人性というのは、ヤコブソンが喝破したコミュニケーションの詩的構造化にフォーカスした議論となっている。ストラザーンの研究が出てくる研究史的な背景としては、1980年代に一世を風靡したマーシャル・サーリンズ(Marshall Sahlins)という文化人類学者の構造人類学というテーゼがある。サーリンズは、それを「構造歴史人類学と呼んだが、それは構造と歴史の交点に出来事を据えて、両次元の弁証法的な変容過程を審

らかにしようという議論と理解されているが (Sahlins, 1985), 実際のところ, サーリンズの理論枠組みは, オセアニア社会の象徴構造を捉えようとした研究であることは否めない。構造の歴史的変容過程は, 結局のところ, 十全に扱えていない。サーリンズが, 研究の主眼に据えたのは, やはり, 意味の世界, オセアニアの意味論, 変われば変わるほど変わらない神話的世界観だった。そのような神話, 意味, 象徴にフォーカスを置いた研究が崩されていく展開が, ニコラス・トーマス (Nicholas Thomas) 等の展開であった。

トーマスは, 歴史人類学者として挙げられる人物である。特にこうした歴史主義の展開は, 一般にポストコロニアリズムと呼ばれる展開と軌を一にして現れた (Thomas, 1992)。そこでは, サーリンズの議論自体が彼自身の西洋の世界観 (イデオロギー) に浸りきったものであるという批判が突き付けられた。つまり, サーリンズがフィジーを含むオセアニアに特有の世界観として論じていくような神話や象徴構造は, 特定の歴史を通じて, 特定のイデオロギーを介して創り出され変容してきたものであるという批判であり, そしてサーリンズのおセアニア社会への構造主義的見立て自体が, 西洋社会に特徴的なイデオロギーに彩られているという批判が浴びせられてゆく。

時系列的に追うならば, そうした歴史人類学による構造主義批判と並行しながら出てきたのが, ストラザーンのメラネシアの人格論だったと言える。こうした人類学的研究自体もまた, 当然ではあるが, 一つのコミュニケーションとして成立している。つまり, それぞれの研究自体がコミュニケーションなわけであるから, コミュニケーション理論であるヤコブソンの詩的構造化のモデルや座標にそれらの研究自体を布置することは, 当然, できるはずである。そのように考えた場合, ストラザーンの分人論は, このヤコブソンの詩的構造化にまつわるコミュニケーション過程にフォーカスを置いたメラネシア文化研究であるといえるだろう。

こうした理論的考察を行う際には, たとえばサーリンズは間違っていて, ストラザーンが正しいのだ, であるとか, トーマスの議論はこの点が間違っていて, ストラザーンがそれを乗り越える論議を行った, であるとか, 過去の研究が否定され, 次の研究が出てくるといった仕方で, それぞれの研究の新規性や独自性が語られることが散見されるわけであるが, そういう仕方ではなく, このコミュニケーション研究の座標上にこれら全ての研究を布置したときに, こういう位置づけがかのうなのではないかと考えられる。どこに, どういう研究がフォーカスを置いていたのかというようなかたちで, それらがどのように布置されるのかを考えるべきであると思われる。そのような視座に立ったとき, ストラザーンがメラネシアの人格や社会性という視座によって論じている事柄は, 生成変化してゆくコミュニケーション過程に軸を置いて, その過程でサーリンズが論じる

ようなオセアニアの神話的世界観がどのようにして喚起され、変容していくのか、神話と歴史をコミュニケーション／行為を軸に論じようとする視座であると別言できるだろう。

4. フィジーの首長就任儀礼

以下では、フィジー諸島の首長の就任儀礼開催に纏わって起きた出来事の考察を行う。上述したストラザーンの研究調査地がパプアニューギニアだったのであるが、フィジーもまたメラネシアに属している。ただし、極めてポリネシア寄りに所在している。

筆者の調査地は、フィジーのヴィティレヴ島東部のダワサム (Dawasamu) 地域である。この地域において、2010年に当該地域の最高首長の即位儀礼を巡って地域を二分する対立が起きた分けであるが、この対立の基底にあったのがフィジーにおける19世紀後期に始まる英領植民地期以来の文書化であった。この文書化とは、フィジー全土の社会集団を統一フォーマットに則って記録するというものであった。その過程において植民地政府は、フィジー社会が有していた集団構成のプロトタイプとして、あるいはプロトタイプを見つけ出そうとして、階層性を有した集団構成のモデルへとフィジー全土の集団当てはめ記録した。フィジーは、こういう社会構造を持っているというモデルを、一見そうした構造が明瞭には特定できなかったとしても、プロトタイプはこれであるという仕方で規定し、そのモデルに基づいて、フィジー全土で、土着の集団を文書化して行った (浅井, 2013, pp. 177-203)。

5. 植民地期の文書化

植民地政府はどのような文書を作成したのだろうか。次の2つの文書が特に知られている。一つ目は、『一般証言』(Ai Tukutuku Raraba)、もう一つは集団の成員を登録するための『氏族登録台帳』(Vola ni Kawa Bula)である (Native Lands and Fisheries Commission, 1930)。『一般証言』が、各氏族の移住伝承など、この集団はどこから来て、どういう移住をして、集団のトーテムは何なのかなどに関する聞き取りを行い、それを記録に取るという作業に基づいて編纂されたものである。

これが、どういう作業であったのか。この作業では、単に集団についての移住伝承を語ってもらい、それをそのまま記述したわけではなく、この作業に当たってのフォーマットがあった。どの集団も、その同じ型に則って記述されている。管見の限りでは、記録された全ての集団において、このフォーマットが採用されている。情報が提示される順番やその言語表現も、全ての集団の記述で同じであ

る。フィジー全土の集団は極めて統一的に形づくられたのである。

実際には、このモデルに必ずしも当てはまらない実態があったにもかかわらず、これがフィジー全土の各集団が則っているはずのプロトタイプであると規定された。その根拠は、当時、社会文化の説明枠組みとして影響があった社会ダーウィン主義の思想に基づいていた。つまり、フィジー社会が示す発展段階においては、特定の社会形態を経ているという仮説に基づいて呈示されたモデルであった。そのようなモデルにおいて重要な意味を持ったのが、各集団の内的構成表である。それぞれの集団がどういう下位集団を有し、それらがどのような序列・階層によって組織されているか。これらを明瞭に記載したのである。これによって、フィジー社会は、階層性を有した集団構成を取り、それぞれの集団単位は常に特定の成員をもつものとして規定されていくことになった。ここに、フィジーの植民地期における社会集団の文書化の重要性がある。

これをパース記号論の視座から論じた場合、類像性が前景化した記述、集団間の比較対照性が明瞭になるような記述をした、明瞭な集団構成ダイアグラムをつくったのである。その後、そうした集団のダイアグラムが人々に良く知られていく、フィジー社会に内面化されていくという過程を辿る。その過程において、重要であったのがもう一つの文書『氏族登録台帳』だった。これは、自分の集団に、新しく子どもが生まれた場合、その子を集団の成員として登録しに行く際に使用される。首都のスヴァ市にある政府官舎に行ってしまう。つまり、新生児をこの台帳に登録する際には、登録を行う者の目に毎回必ず触れる文書である。

自分の集団、自分の氏族は、こういう氏族で、その下位集団である私たちは、系族としてこの位置付けにある、その下位集団のなかの家族集団として、私たちは布置されているといったことが記されている。『一般証言』(Tukutuku Raraba)に書かれている集団のダイアグラムを、『氏族登録台帳』(Vola ni Kawa Bula)として目にするのである。ただ、『一般証言』は、日常的には滅多に人々の目に触れることはない。厳重に保管・管理されている文書になっている。一方、そこに記載されている氏族集団のダイアグラム(構成集団の表)だけが『氏族登録台帳』には記されており、そこには成員の死去などに伴う様々なメモ書きがなされている。つまり、『一般証言』は、人々の目に触れないものとして管理される一方で、そのダイアグラムは『氏族登録台帳』を通じて頻繁に目にされるという過程を通して、『一般証言』記述はまさに神聖な、不可侵なものになり、そこで一般化していったのは、植民地政府が呈示した集団の構成ダイアグラムとそその中の「自集団」の相対的位置付けである。このようにして、植民地政府が文書化を通じて呈示したプロトタイプは、その後のフィジー社会のまさにプロトタイプとなっていった。つまり、その後の人々が従事する集団についての語りの鋳型を提供するものとなっていった。

6. 偽証:NLC 弁務官マクスウェル(1912年～13年)の報告

各集団の構造や有り様は、実は地域ごとに大きく変異を示していたのだが、そのことは、実際に植民地期当時においてもある程度認識されていたことである。これは、その文書化を進めた NLC の弁務官マクスウェル自身が、以下のように言及している。

時折、明らかになる陰謀や偽証は端的に言って恐ろしいものである。通常、原住民たちは、委員会が彼らの土地を扱おうとする際には、委員会に対して何が話されるべきか、何が隠されるべきかについての話し合いを持つことが常のようである。原住民たちは、決して委員会の到着を歓迎しているわけではない。彼らは、真実が明るみに出されれば、出されれば、多くを失い何も得られないことを知っており、真実を隠すためにあらゆる可能な手段に頼るのである (France, 1969, p. 167)。

フィジー植民地政府下の NLC も、フィジー人たちには、何かを聞いても本当のことは言わない、嘘をついている、ということは、当時においても了解されていたようである。他方、フィジー人側の回顧録として、以下のような回顧がある。

土地所有地委員会が訪れるまでの数週間、ほとんど全ての村落では、委員会についての話題で持ち切りだった。私たちは、私たち(氏族・系属の構成員)は、夜のしじまのなかに、私たちの区分けの名前を修正することについて、助言を請うもの、請うたものだった。そして、私たちの祖先神の名前を考え出すこと、これは困難な作業だった。あれは「全くの殺人」だったと私は思っている (Nayacakalou, 1963, pp. 71-72)。

これらから読み取れるように、祖先神の名前、自分たちの集団の神の名前を捏造するということをやっていたようである。そうした意味において、問題含みの文書化だったことが読み取れる。

7. 就任儀礼へ

それで、このダワサム地域で、2010年に儀礼がおこなわれるのだが、その儀礼の前段階で、どういう話があったかという、文書の記述が間違っているという主張がなされ始めた。ちょうど2009年頃に、そういう話が頻繁に議論されるようになってきた。実際に、その後、儀礼がおこなわれるのだが、その儀礼がおこなわれた背景にあったのが、『Fiji Times』に掲載されて様な事柄であった。つまり、「ダワサム地域の首長を、首長にするための就任儀礼をおこなう義務・役職は、私たちにあるのだが、近年になって私たちではない間違った人たちが、儀礼を今まででおこなってきている。それが原因で、この地域では、様々な災厄が起きている。若い人が不慮の事故で死んでしまう、子どもたちの教育が向上しない、

働けど経済的に苦しい状況がある、など色々な問題があるのだが、その問題の根源は、この神が導くような仕方で、地域を形成していない、間違っただけをやっている、間違っただけの集団が、謝って首長の即位儀礼をおこなっているからである」と言われ始めて行く。

より具体的には、ダワサム地域には、Voni という氏族が存在するが、Voni 氏族の下位集団（系族; Matagali）として2つの系族が文書には記載されている。Namaralevu と Naboro である。この Naboro 系族のリーダーが『Fiji Times』のインタビューに答えたのである。すなわち、Namaralevu 系族が文書の記載においては、Voni 氏族の筆頭系族になっているのだが、これは間違いであって、本来の筆頭系族は Naboro 系族であるという主張である。さらに、「元来 Namaralevu 系族は、Voni 氏族の本当の構成集団ではなく、外部からやってきた集団だといった出自に纏わる主張もなされていく。この土地の本当の民、それは私たちであって、集団の過去、真実は、私たちが知っている。Voni 氏族の筆頭系属は、Naboro なのであって、Namaralevu 系族はダワサム地域に逃れてきた際に、Naboro 系族によって集団の構成員として受け入れられたのである」と。植民地期に NLC がしたためた文書の記載は、事実と反している、間違っている、という主張を繰り返した。

しかし、こうした文書に対する疑念に満ちた語り自体が、文書を介して生じた植民地期以降の社会秩序に則って語られており、したがって、植民地期の文書化を通じて顕在化した語り、いわば文書に取り憑かれた語りであるとさえ言える。Naboro 系族は、植民地期に作成された NLC の文書の偽性を論うのであるが、そうした主張自体が、文書化という植民地政策の過程を通じて準備されていたもの、文書を通じて創り出されてきたものである。文書に記載された系族間の序列を覆そう、本来あるべき姿／形へと土地の有り様を戻すべきである、Namaralevu 系族が、首長を即位させる Sauturaga という儀礼的義務に（Voni 氏族の筆頭系族として）君臨してきたのだが、この文書の記載は間違っているものであり、NLC の尋問に際して、Namaralevu 系族は Naboro 系族を裏切った、虚偽の発言を NLC に対して行ったという主張である。この文書が間違いであること、Voni 氏族の筆頭系族は Naboro であることを知らしめるために、再び Naboro が首長の就任式を取り仕切るのだという医師に突き動かされ、儀礼開催が画策されていった。

8. 対照性の語り

こうした彼らの主張は、初代首長の到来に関する神話的語りによっても正当化された。ダワサム地域の最初の首長は、ヴニンダワ地域からやって来た。Delai 氏族が連れてきた。Delai 氏族が、Voni 氏族に最初の首長を渡した。そして、

Voni 氏族が、その首長の即位儀礼を最初に実行したというものである。「私たちは、この土地に首長が来る前から住んでいた、私たちは土地の民であるのだ」と。

一方、そうではない集団が、現在は儀礼をやっている。あるべき仕方ではなく、間違った仕方です。首長は即位させられてきた。違う集団が、持つべきではない Sauturaga の地位に就いてきてしまった。これをやめ、文書以前の最初の土地の姿に戻る必要があるのだ。文書が書かれた前にあった正しい土地の在り方、土地の首長を首長にするあるべき仕方、これに則る必要がある。その正しい行為に従事したいのが私たちであり、私たちがこのダワサム地域の本当の土地の民であるということを書いていく。

さらに、他の語りにおいては、明示的に、「本」という明示的な言及をしている。私たちは「本」に則って、「本」に従って、この儀礼をやっているのではない。私たちは、ダワサムという土地に人が住み始めた最初の時に戻り、そのやり方に則ってこの儀礼を実行しているのであるという主張を行っている。もちろん、ここで言及されている「本」というのは、NLC が植民地期に作成した文書のことである。

9. 儀礼へ

儀礼をおこなうのか、おこなわないのかということで、地域で激しい対立が起きたのだが、最終的には、政府役人、ダワサム地域があるタイレヴ地方の知事が議論に参加することを通じて儀礼の開催が決まった。開催する計画が進められていた儀礼の 1 週間前に、地域の古老および政府役人が介した会議が当該地域の小学校の一室を借りて行われた。その議論の中で、参加者が騒然とする一幕があった。それは、Voni 氏族 Naboro 系族の Nacanieli (首長の即位儀礼を主導した人物) が、Voni 氏族 Namaralevu 系族の Sevanaia という人物に対して行った出自の暴露、および氏族内部での互いの排他的な関係性についてである。

Nacanieli は、自分たちが筆頭系族であり、現在、筆頭系族となっている集団は、外部からやってきた集団であり、本当のダワサムの土地の民ではないということ暴露している。Namaralevu 系族は、ナコロトゥンプ地域からやってきた。そして、土地の伝令として、このダワサムの土地に登録されたのだと言って、本当のダワサムの土地の者ではなく、ナコロトゥンプという西部、フィジー西部からやってきた「よそ者」であると出自を暴露する。そして、Nacanieli は「私の甥っ子」という呼称で明示的に Sevanaia に言及し、Naboro と Namaralevu の両系族の排他的関係性について述べる。

この、しゃべっている私の甥っ子、私たちはデラナ (山岳地帯) で即位儀礼をおこなっていた。その後、私たちは、氏族内で互いに離別することになった。私たちに対し、ある悪

事を働いた。私は、ここで全てを暴露するような度量の小さいことをするつもりはない。仮に話せとおっしゃるなら、私は話します。

この一連のやり取りにおいて Sevanaia は、「それは、土地の伝承ではないではないか、叔父よ」と憤慨し、会議の場は騒然とする。しかし、結果的には、政府の役人が “Agree to disagree” と述べ、様々な見解があるだろうが、儀礼はやりましょうと収め、儀礼は開催されることになった。

こうした一連の語りは、Naboro と Namaraleve という 2 つの系族集団の存在とその序列を前提として、両者を対照的（排他的）に位置付けることで成立していることは明らかである。さらに、最初に首長を連れてきたのは誰か、その首長は、どこからやってきたのか、最初の首長の系譜が、途絶えた後の首長はどこからやって来たのか、最初の首長の系譜と、現在の首長の系譜は異なる出自をもっている、現在の首長たちは、あるべきではない間違っただけの集団によって即位させられてきた、などの語りも、集団間の対照性が際立つ、際立たせるような語りとなっている。このような語りは、オセアニアに関する文化研究においては、まさにサーリンズの外来王に纏わる議論を通じて、オセアニアの世界観、神話／構造として理解されてきたものである。しかし、重要なことは、集団間の対照性を強く喚起するこのような語りも、植民地期の文書化の過程を経て、前景化してきたのではないかという点である。つまり、このような語り自体がいかなる記号過程を経て生じてきたのかという点が分析の焦点でありうるということである。

植民地期の文書化の過程、とりわけそのダイアグラム化を通じて、社会集団間の比較可能性が高められたことにより、その後、集団の歴史や出自に関する語りでは、自集団と他集団という互いの対照性に意識が向きやすい状況が生み出されるに至ったのではないか。あるいは、集団にとっての歴史や出自なるものが、集団間の序列・相対的位置付けへの意識に彩られたものとして生じてきたのではないか。

そして、儀礼が実行される、ドゥリティ村から首長をデラカンド村につれてきて、デラカンド村で首長を即位させる。さらに、デラカンド村からドゥリティ村へと、この即位した首長を戻してきて、あらためて、ドゥリティ村に住んでもらう儀礼を行う。こうしたページェントは全て、地域の最初の首長の到来に関する彼らの神話的語りを模して実行されたものである。

この就任儀礼で為された様々な儀礼的発話の一つが次のものである。「マナは永遠である、真実である、そして、それは永遠である、永遠である、永遠である、永遠である、カムナガは偉大である。」この発話では、マナというフィジーないしポリネシアの概念で、文化人類学ではよく知られている概念が、永遠や真実という概念に結び付けられて発話されていることが分かる。この定型的な発話が、

定型的な手拍子を伴って、儀礼の場で繰り返し行われる。こうした儀礼的発話、言い換えれば、詩的に凝固／形象化した発話に繰り返し従事することによって、そこで行われている儀礼自体が覆しがたい岩のように、真実、永遠、フィジーの言い方を引用すれば、マナの「今ここ」での顕れであることを行為のテキストとして刻印していくというようなことをやっているのではないか（浅井、2020, pp. 495-496）。

10. 考察

このようにダワサム地域では首長の就任儀礼がおこなわれたのであるが、文書の記述が間違っているという主張から始まり、文書の記述に基づかない集団が儀礼を主導して、儀礼が実行された、首長が即位した。政府役人もそのような儀礼開催を認めるといことが起きたのだが、実際に文書の記述が修正されたかという点、修正はされなかった。植民地期の文書には、儀礼開催後もそのまま存在し、修正は施されない。しかし、儀礼を実行した者たちは、儀礼が開催された後の会話において示唆的なことを述べている。

「たとえば、いろいろな者たちが、あんなこと、こんなことを言おうと、私たちは、それを気にする必要はない。私たちは、この土地において、自らが誰であるかを知っているし、それ（を示す儀礼）を実行したのだから。」

今日の、文書を管理するフィジー政府もまた、土地の人たち自身が真実を知っている、土地の人たちが自らの決定で従事する儀礼や語りそれ自体にこそ、真実があると考えている。今日のフィジー社会において、地域に関する意思決定が帰されるような最終的な審級、まさに社会文化を規定する神話／マナの所在は、社会集団の歴史や過去を特定のフォーマットに依拠して統一的に記録した植民地期以来の文書にではなく、その文書が生み出した、形作った土地の人々自身が、自らの決定によって実行する語りや儀礼にこそ見いだされている。歴史や過去は、政府が保管してきた文書ではなく、土地の人々が実践する語りや行為の中にあると考えられている。

言い換えるならば、文書（書記された神話）ではなくて、神話について語る行為、コミュニケーションの連鎖が再帰的に生み出し続ける詩的契機、「今ここ」の儀礼にこそ、現代フィジー社会の神話、社会文化的な審級、マナの所在が見出されているといえるのではないか。そして、ストラザーンが「分人」(dividual) という概念によって喝破したメラネシアの社会性とは、まさにこうしたマナの所在、コミュニケーションの連鎖が再帰的に生み出し続ける詩的契機、指標的類像化の過程、この記号過程を捉えたものに他ならない。すなわち、ヤコブソンが

唱えた詩的機能論，およびその後に展開した現代言語人類学の社会文化理論，つまり，指標的な類像化の過程にコミュニケーションの本質を見いだしてきた視座と，メラネシア的な社会性の根幹をコミュニケーションの連鎖が再帰的に生み出し続ける詩的契機に見出すストラザーンの分人論，この両者には強い親和性があると考えられるだろう。

参考文献

- 浅井優一 (2013). 『儀礼のセミオティクス：フィジー、ダワサム地域における神話と詩的テクストに関する言語人類学的研究』 三元社.
- 浅井優一 (2020). 「始祖の痕跡を辿る：図／地の反転、記号過程、或いは南太平洋のリアリズム」『文化人類学』 84 卷 4 号, 482-502 頁.
- France, P. (1969). *The charter of the land: Custom and colonization in Fiji*. Melbourne: Oxford University Press.
- Jakobson, R. (1960). Closing statement: Linguistics and poetics. In *Style in Language*. Sebeok Thomas A. (ed.), pp. 350-377. MIT Press.
- Native Lands and Fisheries Commission (1930). *Ai Tukutuku Raraba*. Native Lands and Fisheries Commission.
- Nayacakalou, R. R. (1963). *Fijian leadership in a situation of change*. (Doctoral dissertation). University of London, London.
- Sahlins, M. (1985). *Islands of history*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Silverstein, M. (1993). Metapragmatic discourse and metapragmatic function. In J. A. Lucy (Ed.), *Reflexive language: Reported speech and metapragmatics* (pp. 33-58). Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Strathern, M. (1988). *The gender of the gift: Problems with women and problems with society in Melanesia*. University of California Press.
- Strathern, M. (2004). *Partial connections* (updated ed.). AltaMila Press.
- Thomas, N. (1992). The inversion of tradition. *American Ethnologist*, 19(1), 213-232.